

読売新聞 きょう（9月22日）のイチ押し

1面・社会面 元厚労次官の村木さん「検察は振り返り続けて」

大阪地検特捜部による証拠改ざん事件の発覚から21日で10年。改ざんにつながった事件で逮捕、起訴され、公判で無罪となった元厚生労働次官の村木厚子さんが本紙の独自取材に応じ、「検察が振り返り続け、忘れないことが大切」と語りました。

- ★ 村木さんは、改ざん発覚後に会った複数の元検事総長から、一言目には「ありがとう」と言われたことが印象的だったそうです。「検察を変えるきっかけになったのはよかった」と振り返りました。
- ★ 拘置所で勾留中に若い女性受刑者らと出会った経験から、DVや虐待を受けた若い女性の支援団体を設立。今も事件について話すのがつらくなる時があるものの、「得たものもいっぱいある。体力に合わせ、やれることを少しずつ」と前向きな姿勢を見せていました。

3面 ワクチン外交 中露もくろむ

新型コロナウイルスのワクチンを巡り、中国とロシアが自国開発のワクチンを新興国や途上国に売り込む動きを強めています。

- ★ 米国がワクチン供給で自国優先を掲げる一方で、中国は「優先供給」を口説き文句にして、中東や東南アジアなど40近い国で「ワクチン外交」を展開。ロシアも、サウジアラビアにワクチンの共同生産を働きかけるなど積極的です。
- ★ 新型コロナのワクチンは、期待が先行気味です。中露のワクチンには安全性や手続きの透明性を懸念する声も出ています。

他紙と比べて

かつて注目を集めた出来事の当事者らにじっくりと話を聞き、当時の記憶とその後の人生に迫るシリーズ「あれから」。今回登場するのは、「耳が聞こえない作曲家」のゴーストライターだったことを告白した作曲家の新垣隆さんです。世間を騒がせた「あの事件」と、事件をきっかけに一変した人生を、一面と特集面でたどります。